

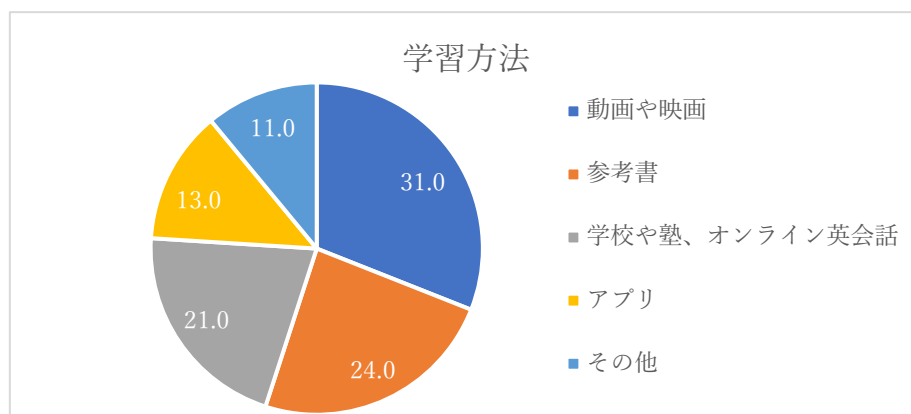
## 英語学習に対する意識調査

近藤 優香（文教大学情報学部メディア表現学科）

### 1. はじめに

中学生の頃から英語が苦手だが、英語を話すことに憧れがある私は、大学生になり海外の人の動画配信を見るようになり、参考書で勉強をするよりはるかに英語学習が捗ることに気が付いた。また、友人が韓国アイドルを好きになり、参考書などを使わず楽曲や動画などを利用し独学で日常会話レベルの韓国語を身に着けていた。英語学習ひろばが行った調査では以下のような結果が得られている。TOEIC や英語検定などの資格試験学習者を対象に行った「学習方法」についての項目では、【教材などを使い独学(59.2%)】がもっと多く、次いで【学校や塾(36.4%)】であった。しかし、英語ができる人を対象に行った調査の「英語ができる人が答える最も効果の合った学習方法」という項目で最も多かった回答は、【動画や映画を使った学習(31.0%)】であった。次いで、【参考書を使った学習(24.0%)】、【学校や塾、オンライン英会話(21.0%)】という結果であった。動画や映画を使った学習と答えた人の多くは、学習に YouTube を取り入れていると回答した。このように、学習の目的により、学習方法が異なることがわかる(英語学習ひろば、2022)。

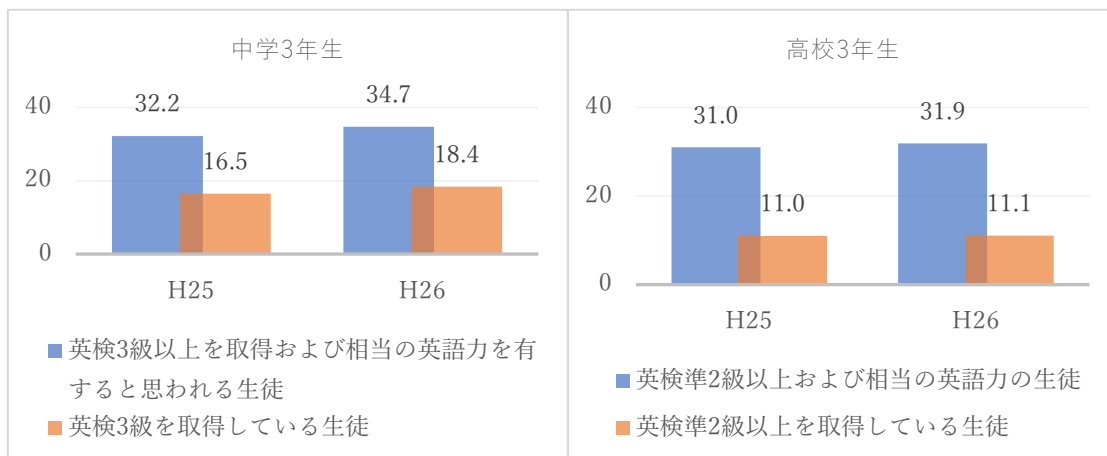
図表 1 英語ができる人が答える最も効果的な学習方法



このことより、授業の英語学習と自主学習での学習者の意識の違いを明らかにしたいと考えた。

グローバル化が進む現代で外国語はより必要とされてきているのに対し、現状の外国語教育でその年齢相応の英語力を身に付けられている生徒が少ないという現状から、2020年に文部科学省は学習指導要領の改訂を実施した。

図表 2.3 文部科学省（生徒の英語力の状況）を基に筆者作成



文部科学省が告示した 2020 年度からの学習指導要領の主な改訂内容としては、「聞く、話す、読む、書くを総合的に育成する」とし、小学校中学年から聞くこと、やり取りや発表などの話すことを中心とした外国語活動を行い、高学年から読む、書くを加え、中学校での学習につながる外国語を学習指導要領に導入した（文部科学省、2017）。2006 年の國本和恵の「小学生の英語学習意欲に関する研究」によると、小学 3 年から 6 年生を対象に英語活動において「楽しい体験、嫌な体験があったか」について調査したところ、年間英語活動時間が 70 時間の学校の生徒では、3、4、5 年生と比べ 6 年生は楽しい体験があったと回答した割合が少ないことが明らかになっている。「楽しい体験と嫌な体験の自由記述」を調査した項目では、記述内容を関連するもので分類したところ、嫌な体験の中の「仲間関係」の記述にはコミュニケーション活動が多いことから仲間関係でのトラブルが発生しやすいと考えられた。楽しい体験の記述の中の「有能感」に分類された意見には、【新しい言葉を知る】、【覚える】の記述が多く、「英語学習において小学生は知識を得て、それを覚える楽しさを感じている」のではないかと分析している。また、この研究から「楽しい体験の後の有能感と比較して、嫌な体験の後の無能感の記述の割合は、楽しい体験の後の有能感のおよそ 4 倍も高い」という結果が得られている。このことから、失敗した時の無能感が有能感より高い可能性が考えられると國本は言う。（國本、2006）

このことから、学習者の観点から英語が身に付く授業とは何か、英語教育の改善点を明らかにしたいと考えた。本調査では、以上 2 つの考えから、英語学習に対する意識調査を行った。

## 2. 調査研究の方法

### 2-1. 調査概要

本調査の実施概要は以下の通りである。

調査実施期間：2022年12月20日～12月27日、2023年1月10日～1月17日

調査対象：文教大学湘南・あだち・越谷キャンパス在学1～4年生

調査人数：標本数624票（内不在24票）

有効回答数 80票 回答率 13.0%

### 2-2. 調査項目

調査項目は大別して、〈回答者自身に関する項目〉、〈英語教育に関する項目〉、〈英語学習に関する項目〉。以上3つによって構成した。以下、主な項目の詳細。

#### 〈回答者自身に関する項目〉

「学部」や「性別」、「年齢」に加えて、「5因子論」による性格測定も行った。「5因子論」では、性格により英語を身に着ける最適な英語学習法や英語の必要性、英語で話しかけられた時の対応などに変化があるのかを調査した。

#### 〈英語教育に関する項目〉

「英語の授業が始まった時期」や「英語学習を始める最適な時期」、「海外に行った経験」、「高校の英語の授業の進め方」「英語を身に着ける必要性」など、実際に受けた英語教育とその結果、印象を調査した。

#### 〈英語学習に関する項目〉

「英語に関する検定の有無」や「留学経験」、「英語を身に着ける学習方法」、「英語学習で重視する点」、「普段から英語に触れているか」、「自主学習の有無」、「身近に英語を話せる人がいるか」など、英語学習の経験や私生活で英語に触れる経験があるかを調査した。

### 2-3. 調査方法

調査方法は、Google フォームを利用し、作成した。サンプリングで抽出した該当したメールアドレスに調査票の URL を添付し、メールの送信を行った。

サンプリング方法は、学部ごとに層化抽出を用いて行った。

以下、各部割り当て詳細（図表4）。

図表 4 学部割り当て数と割合

キャンパス	学部名	学科名	学科別学生数	学部別学生数	対象者	割合
湘南校舎	情報	情報システム	430	1240	77	75.5%
		情報社会	382			
		メディア表現	430			
	健康栄養	管理栄養	404	404	25	24.5%
あだち校舎	経営	経営学科	717	717	45	39.2%
	国際	国際理解	564	1114	69	60.8%
国際観光		550				
越谷校舎	教育	学校教育	914	1492	92	32.0%
		心理教育	101			
		発達教育	477			
	人間科	人間科学	614	1730	107	37.1%
		臨床心理	526			
		心理	590			
文学	日本語日本文学	503	1435	89	30.8%	
	英米語英米文学	370				
	中国語中国文学	309				
	外国語	253				

※学籍番号からの推計学生数であり、実際の在 student 数とは異なる。

※対象者の内、24名はエラー。

※卒業年次以降の学生や学籍番号が特殊な留学生は含まれない。

### 3. 調査結果

#### 3-1. 回答者の基本属性

回答者の基本属性に関して、「性別」は【男性】が31名(38.8%)、【女性】が49名(61.3%)であった。「年齢」は【18歳】が2名(2.5%)、【19歳】が23名(28.8%)、【20歳】が18名(22.5%)、【21歳】が20名(25%)、【22歳】が16名(20%)、【その他】が1名(1.3%)であった。「学部」は【教育学部】が15名(18.8%)、【人間科学部】が29名(36.3%)、【文学部】が7名(8.8%)、【情報学部】が9名(11.3%)、【健康栄養学部】が5名(6.3%)、【国際学部】が10名(12.5%)、【経営学部】が5名(6.3%)であった。

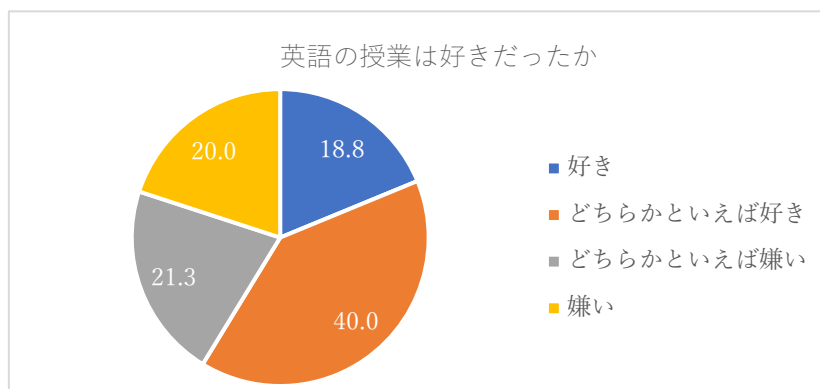
#### 3-2. 英語教育について

2020年以前の文部科学省が定めた学習指導要領では、小学5、6年生から外国語活動という名前の授業を行うという方針であった。自身が受けた英語教育の始まりについて調べるため、「英語の授業が始まった時期」について回答してもらった。最も多かったのは、【小学高学年】の43名(54.4%)であった。次いで【小学低学年】の20名(25.3%)、【幼稚園、保育園】9名(11.4%)、【中学生】7名(8.9%)、【無回答】1名という結果で、小学生の時に英語の授業が始まったことがわかる。

英語の授業に対する好感度を調べるため、「英語の授業は好きだったか」についてあては

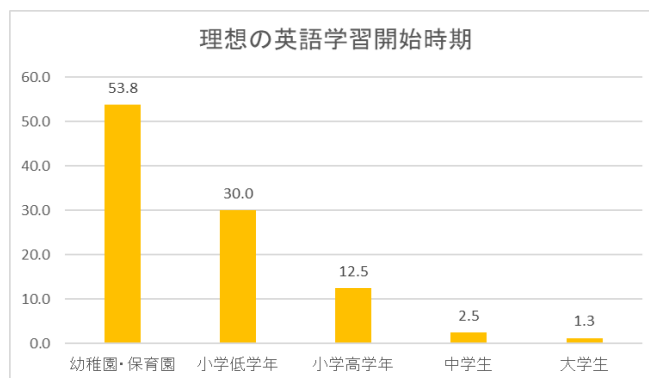
まるもの1つに回答してもらった。最も多かったのは【どちらかといえば好き】32名(40.0%)であった。次いで【どちらかといえば嫌い】17名(21.3%)、【嫌い】16名(20.0%)、【好き】15名(18.8%)という結果で好き、どちらかといえば好きという回答が多いことが分かる。

図表 5 英語の授業は好きだったか



また、英語を身に着けるためにはどの時期に英語学習を始めればよいのかを調べるため、「英語学習を始める理想のタイミング」について当てはまるものを1つのみ回答してもらった。最も多かったのは、【幼稚園・保育園】43名(53.8%)であった。次いで【小学低学年】24名(30.0%)、【小学高学年】10名(12.5%)、【中学生】2名(2.5%)、【大学生】1名(1.3%)、【高校生】0名(0.0%)という結果であった。そして、幼稚園・保育園や小学低学年に始めた方がよいと回答した理由には【抵抗感が少なくなるから】、【身に付きやすいから】という理由が多く挙げられた。小学高学年から始めるとよいと回答した人の理由としては、【日本語が身に付いてからがよいから】という理由が多く挙げられた。この結果から、できるだけ小さい頃から英語に触れていた方が、抵抗感が少なく身に付きやすいと考える人が多いことが分かると同時に、英語学習において抵抗感を感じている人が多いこともわかった。

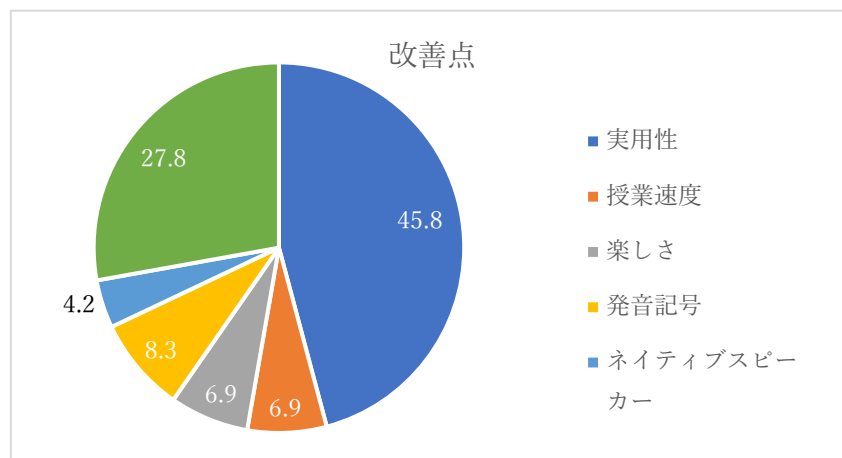
図表 6 理想の英語学習の開始タイミングの割合



早くから英語に触れると良いという意見が出たが、早くから触れている人の方が英語を使えるのだろうか。これを調べるため「英語の授業の始まった時期」を独立変数に、「小学、中学、高校、大学の成績」を従属変数にクロス集計を行った。しかし、有意な差は見られなかった。また、早くに英語に触れていると英語への抵抗感が少なくなるという意見から、英語の授業の開始時期と英語の授業への好感度に関係があるのではないかと考え「英語の授業の始まった時期」を独立変数、「英語の授業の好感の有無」を従属変数でクロス集計を行った。しかし、有意な差は見られなかった。以上から、英語の身に付きやすさと英語への抵抗感は、英語の授業の開始タイミングとは関係がないのではないかと考える。

英語の授業の改善点を調べるため、「自身の英語の授業を受けた経験から思う改善点」について自由記述で回答してもらった。その結果、リーディング重視であったり会話の練習の場がなかったりなどの【実用的でない】という意見が最も多く 33 名 (45.8%)、次いで【発音記号】が 6 名 (8.3%)、授業においてかかれてしまうなどの【授業速度】と【楽しさ】が共に 5 名 (6.9%)、もっと ALT と話したかったなどの【ネイティブスピーカー】が 3 名 (4.2%)、【ない】 20 名 (27.8%) という結果になった。この結果から多くの人は、試験や検定のためではなく、旅行などのプライベートの時間や仕事で使える様なコミュニケーションの取れる英語を学びたいと感じている人が多いと考える。

図表 7 英語の授業の改善点



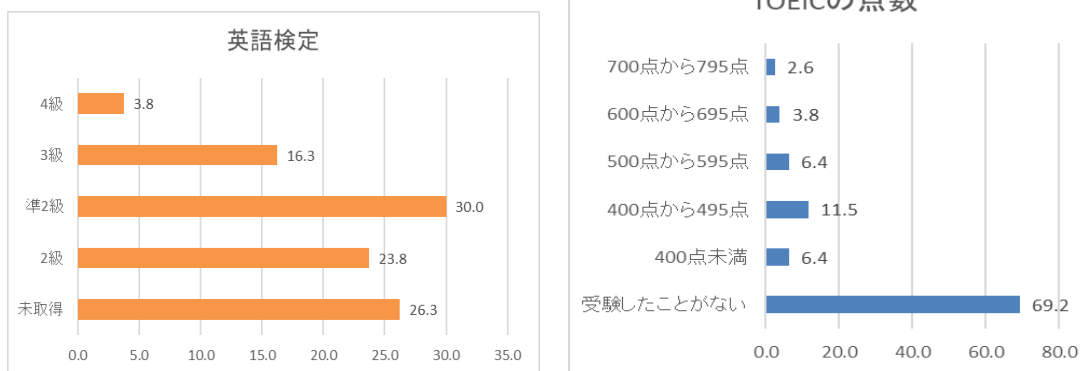
2020 年度学習指導要領改訂前の授業内容について調べるために、「高校の授業の主な内容」について当てはまるもの 1 つのみ回答してもらった。その結果、最も多かったのは【リーディング中心の授業】 51 名 (63.8%) であった。次いで【ライティング中心の授業】 20 名 (25.0%)、【スピーキング中心の授業】 9 名 (11.3%) という結果であった。このことから、「英語の授業の改善点」の項目で上がった実用的な英語を学びたいという意見が多い中で、スピーキングに重きを置いた授業はあまり行われておらず、反対の学校の試験や受験で重要となるリーディングやライティングを中心とする授業を受けてきた人が多いということがわ

かった。

### 3-3. 自主学習について

まず、英語を必要だと思っている人がどれだけいるのかを調べるため、英語の必要性について「必要」を1点、「不要」を5点とした5段階評定をしてもらった。その結果、最も多かったのが【1点】35名(43.8%)、次いで【2点】28名(35.0%)、【3点】10名(12.5%)、【4点】4名(5.0%)、【5点】3名(3.8%)という結果となり、平均値は1.9点と必要だと考えている人が多いことがわかる。英語が必要であると多くの人が答えているが、実際に検定などを取得し身に付けようとしている人はどれくらいいるのか。これに関して「英語検定、TOEICを受験したことがあるか」の当てはまるもの1つに回答してもらった。英語検定では、最も多かったのは【準2級】24名(30.0%)であった。次いで【持っていない】21名(26.3%)、【2級】19名(23.8%)、【3級】13名(16.3%)、【4級】3名(3.8%)、1級や準1級を取得している人はいなかった。そして、TOEICについて最も多かったのは【受験したことがない】54名(69.23%)であった。次いで【400点～495点】9名(11.5%)、【400点未満】、【500点～595点】同数の9名(11.5%)、【600点～695点】3名(3.9%)、【700点～795点】2名(2.6%)、無回答2名という結果であった。英語が必要だと感じながらも検定は取得しない人が多く、さらに英語検定と比較しTOEICの受験者が少ないことが明らかとなった。

図表 8、9 英語検定、TOEIC 取得級と点数の割合



また、英語検定の取得とTOEICの受験に関連があるのかを調査するため、「英語検定を取得しているか(Q4)」を独立変数、「TOEICを受験したことがあるか(Q5)」を従属変数でクロス集計を行った。その関連を示したのが、図表10である。データからは、英語検定の取得の有無にかかわらず、TOEICを受験したことがない人が6割以上を占めていることがわかる。また、英語検定の取得級が高いほど、TOEICの点数も高いのではないかと予想していたが、カイ二乗検定の結果、2つの変数に有意な差はなく、英語検定の取得(Q4)とTOEICの受験(Q5)には、関連がないことがわかった。

図表 10 英語検定と TOEIC のクロス集計表

	受験したことがない	400点未満	400点から495点	500点から595点	600点から695点	700点から795点	合計
持っていない	16 (76.2)	1 (4.8)	3 (14.3)	1 (4.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	21 (100.0)
2級	11 (61.1)	1 (5.6)	1 (5.6)	2 (11.1)	3 (16.7)	0 (0.0)	18 (100.0)
準2級	14 (60.9)	2 (8.7)	4 (17.4)	2 (8.7)	0 (0.0)	1 (4.3)	23 (100.0)
3級	10 (76.9)	1 (7.7)	1 (7.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (7.7)	13 (100.0)
4級	3 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (100.0)
合計	54 (69.2)	5 (6.4)	9 (11.5)	5 (6.4)	3 (3.8)	2 (2.6)	78 (100.0)

$\chi^2=18.1$ ,  $df=20.0$ ,  $n.s.$   
()内は割合

英語の習い事経験について調べるため、「英語の習い事の経験の有無」と「習い事を始めた理由」を自由記述で回答してもらった。習い事経験では、【ある】41名(51.3%)、【ない】39名(48.8%)という結果となった。習い事を始めた理由は、6種類に分けることができた。最も多かったのは【親の勧め】17名(42.5%)、次いで【自発的】8名(20.0%)、【成績のため】6名(15.0%)、【将来のため】と【友人の誘い】、【わからない】が各々3名(7.5%)という結果となった。親の勧めが多い中で、自発的に習い始めた人も多いことがわかった。次に「3-2.英語教育について」で述べた様に、英語の授業内容に実用性を求めていることから、留学に行く人は行かない人に比べて英語学習の意識が高いのではないかと考えた。これを調べるために「現在自主学習をしているか」の項目を独立変数、「留学経験」を従属変数にカイ二乗検定を行った。その結果、有意な差は見られなかった。では、留学の許可をもらうにあたり必要となる英語力を測る検定についてはどうだろうか。「留学経験」を独立変数、「英語検定の取得級」を従属変数にカイ二乗検定を行った。留学経験があると答えた人は全員が英語検定を取得していたが、留学経験による英語検定の取得に有意な差は見られなかった。また、「留学経験の有無」を独立変数、「TOEICの点数」を従属変数にしてカイ二乗検定を実施したところ、留学の経験による有意な差がみられた( $\chi^2(5)=17.48, p<.01$ )。このことから、留学に行くために TOEIC で何点をとるなどの目標を立てて英語学習に取り組んでいるのではないかと考える。

図表 11 留学経験の有無による TOEIC の点数の差

		TOEICの点数						合計
		受験したことがない	400点未満	400点~495点	500点~595点	600点~695点	700点~795点	
留学経験	ある	4 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (25.0)	2 (25.0)	0 (0.0)	8 (100.0)
	ない	50 (71.4)	5 (7.1)	9 (12.9)	3 (4.3)	1 (1.4)	2 (2.9)	70 (100.0)
	合計	54 (69.2)	5 (6.4)	9 (11.5)	5 (6.4)	3 (3.8)	2 (2.6)	78 (100.0)

$\chi^2=17.48$   $df=5$   
()内は割合  $p=.004$

自主学習の方法について調べるため、「英語を身に着けるための効果的な勉強法」について最も重視しているもの1つのみ回答してもらった。最も多かったのは、【スピーキング】の46名(57.5%)であった。次いで【単語量】27名(33.8%)、【文法の知識量】4名(5.0%)、【その他】3名(3.8%)という結果になった。その他の回答は、全てリスニングに関する回答



であった。

### 3-4. メディア学習

序論で述べたように、私は参考書の他に YouTube で英語に関する動画を見て勉強することがある。このようなメディアを利用した学習方法について調査するため、まず「英語に触れる機会」と「性別」でクロス集計を実施した。その結果、【ない】【その他】を除いて、【英語の曲】が男女共に最も多く計 36 名、次いで男性は【映画やドラマ】6 名(19.4%)、【SNS】5 名(16.1%)、女性は【映画やドラマ】が 17 名(34.7%)、【SNS】11 名(22.4%)と女性の方が海外の映画やドラマで英語に触れる機会が多いことがわかる。

図表 12 英語に触れる機会と性別のクロス集計表

	英語に触れる機会						合計
	海外映画・ドラマ	英語の曲	海外の人のSNS	スマホなどの設定言語が英語	ない	その他	
男性	6 19.4%	15 48.4%	5 16.1%	2 6.5%	14 45.2%	1 3.2%	31
女性	17 34.7%	21 42.9%	11 22.4%	1 2.0%	18 36.7%	3 6.1%	49
合計	23	36	16	3	32	4	80

次に「効果的なメディア学習法」についてあてはまるもの 1 つを回答してもらった。その結果、最も多かったのは【英語の映画やドラマを見て内容を理解する】45 名(56.3%)であった。次いで【設定言語を英語にして毎日触れるようにする】19 名(23.8%)、【英語の曲などの音声のみを聞き流す】16 名(20.0%)という結果となった。また、上記の効果的なメディア学習法について性別により違いがあるのかを調査するためカイ二乗検定を行った(図表 13)。データからは、女性は 6 割近くが「映像を見て内容を理解する」勉強法を支持し、男性は「映像を見て内容を理解すること」と、「毎日触れること」共に 4 割近くが支持している傾向にあることがわかる。そして、カイ二乗検定の結果、2 変数は 5%水準で有意な関連が認められた( $\chi^2(2)=6.62, p<.05$ )。

図表 13 性別(Q23)と効果的なメディア学習法(Q12\_1)のカイ二乗検定

	映像を見て内容を理解すること	音声のみを聞き流すこと	毎日触れる	合計
男性	13 (41.94)	6 (19.35)	12 (38.71)	31 (100.00)
女性	32 (65.31)	10 (20.41)	7 (14.29)	49 (100.00)
合計	45 (56.25)	16 (20.00)	19 (23.75)	80 (100.00)

$\chi^2=6.62, df=2$   
( ) 内は、割合  $p=.036$

上記の結果を受け、メディアを利用した学習方法は普段触れているメディアに影響しているのではないかと考え、普段英語に触れる機会と性別に違いがあるのか、普段英語に触れる機会により学習に効果的だと感じるメディアに関連があるのかを調べた。まず「性別」を独立変数、「日常的に英語に触れる機会」を従属変数にしてカイ二乗検定を行ったが有意

な差は見られなかった。次に「勉強用途以外で、日常的に触れる英語」を独立変数、「効果的なメディア学習法」を従属変数にしてカイ二乗検定を行ったが、これも有意な関連は見られなかった。

### 3-5. 社会的環境要因による違い

周囲の環境により、英語学習への意識が変化するのではないかと考える。このことを調べるため、まず「留学の経験の有無」と「海外旅行の経験」の関係を調べた。「留学の経験の有無」を独立変数、「海外旅行の経験」を従属変数にしてカイ二乗検定を行った。その結果、有意な差が見られた( $\chi^2(2)=9.99, p<.01$ )。このことから、留学経験のある人は、学校行事で海外経験があることが多いことが分かった。また、従属変数「英語の授業への好感度」、独立変数を「海外経験の有無」の1要因2水準被験者内計画の分散分析を実施した。その結果「海外経験の有無」の主効果が有意であった( $F(2,77)=4.93, p<.05$ )。このことから、海外経験は、英語へ意識を向けるきっかけになり得ると考える。

図表 14 留学経験による海外旅行経験の関係、

	海外旅行の経験						合計
	ない		学校行事		プライベート		
ある	1	(12.5)	5	(62.5)	2	(25.0)	8 (100.0)
ない	49	(68.1)	14	(19.4)	9	(12.5)	72 (100.0)
合計	50	(62.5)	19	(23.8)	11	(13.8)	80 (100.0)
	( )内は割合		$\chi^2=9.99$		$df=2$		$p=.007$

図表 15 海外経験と英語の授業への好感度の分散分析

	<i>n</i>	平均値	標準偏差
ない	50	2.66	0.96
学校行事	19	1.84	0.76
プライベート	11	2.36	1.29

身近に英語を話せる人がいると英語を意識することが多いのではないかと考えた。これを調べるため「身近に英語を話せる人がいるか」を独立変数、「海外の人に道を聞かれたらどうするか」を従属変数にしてカイ二乗検定を行ったが有意な差は見られなかった。このことから、身近に英語を話せる人がいても自身が英語に興味があるかなどの、個人的な要因が関係しているのではないかと考えられる。

### 3-6. 個人的な内的要因による違い

回答者の性格について調査するため、15項目を4段階で評価してもらい、因子分析を行った。その結果、6つの因子に分類することができた(図表 16)。第一因子は「人と関わることが好き」や「社会と関わることが好き」、「陽気」という要素が抽出されたため【社会的】

と名付けた。第二因子は「不安になりやすい」や「緊張しやすい」、「心配性」という要素が抽出されたため【責任感】と名付けた。第三因子は「独創的」と「好奇心が強い」の探求心の強さが伺える要素が抽出されたため【探求心】と名付け、第四分子は「几帳面」や「計画性のある」、「ルーズ」の自由な要素が抽出されたため【マイペース】と名付けた。第五因子には「短気」や「寛大」、「親切」の素直さが見られる要素が抽出されたため【素直】と名付けた。第六因子は「興味の幅が広い」という多彩だと感じる要素が抽出されたため【多彩】と名付けた。

図表 16 性格に関する因子分析

	因子分析						平均値
	社交的	責任感	探求心	マイペース	素直	多彩	
人と関わることが好き	0.853	-0.075	-0.074	0.139	-0.094	0.186	1.99
社会と関わることが好き	0.759	0.054	0.233	0.116	0.054	0.224	2.31
陽気	0.632	-0.144	0.393	0.165	0.053	-0.305	2.66
不安になりやすい	-0.004	0.883	-0.001	0.034	-0.135	0.007	1.71
緊張しやすい	-0.033	0.831	-0.087	-0.024	0.041	0.155	1.64
心配性	-0.021	0.668	0.163	0.244	-0.146	-0.45	1.56
独創的	0.078	-0.126	0.86	0.047	-0.023	0.016	2.61
好奇心が強い	0.298	0.104	0.78	0.081	0.071	0.274	2.21
几帳面	0.192	0.172	0.052	0.79	0.103	0.065	2.25
ルーズ	-0.174	0.124	-0.021	-0.778	-0.143	0.075	2.11
計画性のある	-0.056	0.198	0.565	0.64	-0.047	0.089	2.54
寛大	0.118	-0.177	0.021	0.028	0.857	-0.081	1.95
短気	0.233	0.053	0.079	-0.17	-0.786	-0.256	2.85
親切	0.515	0.265	0.299	0.211	0.573	-0.195	1.95
興味の幅が広い	0.219	0.047	0.275	0.061	0.035	0.82	2.04
固有値	2.251	2.163	2.09	1.847	1.776	1.28	
寄与率	15.007	14.421	13.932	12.315	11.838	8.533	
累積寄与率	76.046						

性格により勉強法に違いがあるのかを検討するため、独立変数に「勉強法」、従属変数に「好奇心が強い」の1要因4水準被験者間計画の分散分析を行った。その結果、勉強法の主効果が有意であった( $F(2,77)=4.15, p<.05$ )。多重比較(Holm法)の結果、「毎日触れる」の平均値は「音声のみを聞き流すこと」の平均値よりも5%水準で有意に高いことが明らかとなった(図表 17)。

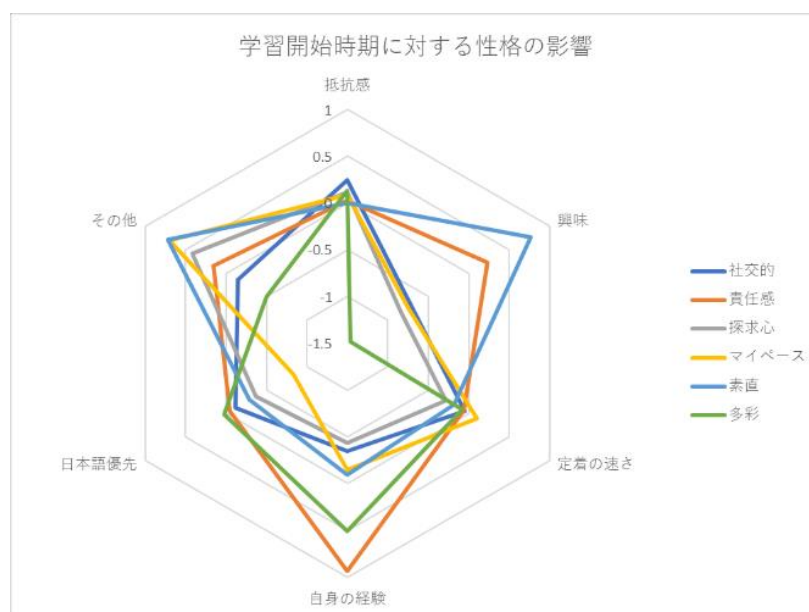
図表 17 勉強法と性格

	n	平均値	標準偏差	F値	df	p
象を見て内容を理解すること	45	2.222	0.823	4.154	2,77	.019
音声のみを聞き流すこと	16	1.750	0.856			
毎日触れる	19	2.579	0.902			

性格により、英語を身に着けるために重要視する点は異なるかを調べるため「英語学習を

始める時期」を独立変数、因子分析で出力した因子得点を従属変数に一元配置分散分析を実施した。その結果、【マイペース】の第四因子に 5%水準で有意な差が見られた ( $F(5,60)=2.47, p<.05$ )。図表 18 から、有意な差は見られなかったが学習者自身の興味を重要と考えるのは素直な人が多く、責任感の強い人は自身の経験から学習の開始時期を考えているのだと感じた。

図表 18 学習開始時期に対する性格の影響



#### 4. まとめ

本調査では、外国語が必要とされ、外国語教育も改善されていくなかで教育を受けてきた学生の思う学習方法と授業の改善点を調査してきた。調査の結果、受けてきた英語の授業が、リーディング中心だったという人が多い中で、学生は 2020 年に改訂された学習指導要領同様、スピーキングに力を入れてほしいという意見が多いことが分かった。英語教育のやり方が変化していく中で、学習者が思う効果的な学習方法に学習指導要領の内容が近づいてきているということが明らかとなった。また、多くの人が英語を身に着けることが必要だと回答したが、学習を始めている人は少ないということも明らかとなった。学内での勉強の他に、修学旅行や海外旅行などで直接体験することで、英語に興味を持つきっかけとなり、英語学習に繋がると考える。

私たちが習っていた時と比べ、現在の英語教育は、スピーキングに力を入れる方針に変化した。この変化により、学校行事で海外に行くなど、ネイティブとの会話の機会が増えることにより英語に対する抵抗感を感じる生徒が減少していき、グローバル化に合った語学レベルになるのではないかと考える。

## 5. 参考文献

英語学習ひろば、【英検学習時間目安】英語検定学習者 600 名を対象に調査、

<https://hirononayami.com/eiken-study-time/#toc4>、2023 年 2 月 19 日閲覧

熊谷龍一,谷伊織,中根愛,並川努,野口裕之,脇田貴文(2012)「Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討」心理学研究 2012 年 第 83 卷 第 2 号 pp.91-99efaidnbmnnnibpajpcgclefindmkaj、2023 年 2 月 12 日閲覧

文部科学省、「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編」、2023 年 2 月 11 日閲覧

文部科学省、「平成 26 年度 英語教育実施状況調査 生徒の英語力の状況」、chrome-extension://efaidnbmnnnibpajpcgclefindmkaj/https://www.mext.go.jp/b\_menu/shingi/chousa/shotou/112/shiryo/\_icsFiles/fieldfile/2016/06/13/1367805\_6.pdf、2023 年 2 月 11 日閲覧